



ピクタインダクン

(おきみがりにぼし)

第 36 号

発行日 2022年6月1日

発行人 矢代 しづ

秋田市御野塩7-1-29-305

浅春

まだ温みのない

白金しろかねいろの川をみつめている

と 乾いた心の窪みに

さざ波が打ちよせてくる

波音は

かなしみと侘しさがかさなつた

老いのように

度々おりてくる

つめたさが伏す川でも

清らかな光が翼をひろげ

やさしく微笑むのを夢みている

やがて心の鏡にも

光の階段を下りてくる

鳥の まどろむ姿がまるく映るだろう

水のあやとり

晩秋

の

白く傾いた

午後

公園の一角の

ざわめく

噴水

は

よどみなく

水を

噴きあげ

上段の

円形の水盤に

さざ波をたたえる

と

間もなく

まるく収まった

水が

あふれ

か細い絹糸のように

ゆれながら

下段の水盤に

流れおちていく

コンクリートの台座に

地面に張りついた

翳のように

身じろぎひとつしないで

だれか

座っている

テツだ！

わびしさを

身にまとった

彼の

黒くなずんだ

後ろ姿

わずかに

肩が

右から

左へ

傾いている

おそらく

今まで

日が

縮む空間に

たった

ひとりで

いたのだろう

彼は

一度だけ

なぜ公園にいるのかを

うち明けたことがあった

歪んだ輪郭

の

家から

退避する

場所

が

公園だ

と

なすすべを知らない

十二歳の少年には

あまりにも

重すぎる

家庭

の
事情

彼は

やさしい風がわたる

公園の

きらめく

水盤に

光と翳が

織りなす模様を

厭きもせず

眺めていたのだろう

水のおもてに

現れる

斑模様は

冷えきった

心の叫び

落胆し

沈む

彼の闇

が

映っている

水の器

は

自らを投影する

鏡

心の深層を

さらし

影を

すくい

ことばを

立たせ

水と語りあう

この

時間だけ

は

唯一

テツが

一人の少年

に

戻れるのだ

自らを慰撫し

心のやすらぎを保つ

水との交感

それが

水のあやとり

輪郭

を

失った家族

は

朧にかすみ

くつついたり

離れたり

さびしさを

紛らわすように

ゆらめきあっている

彼は

ぼつんと

つぶやいた

テツの

テツ

は

鉄人

の

鉄

ぼくは

絶対

負けないぞ！

小さな

眼

から

こぼれる

かなしみの

波紋

が

ひろがる

やがて

日が落ち

公園の辺りは

うつすら

朽葉色

さざめく声も

遠のき

通りがかる

人も

まばら

静けさのなかで

しめやかな風

が

彼を

慰めた

頬には

乾いた

二筋

の

跡

いまだ

寂しい

るつぼのなかで

もがき

うめき

苦しむ

彼の

負の連鎖

は

解けない

彼の

心に内在する

鋭く

つめたい

罵り

の

ことば

を

かき消すように

暗闇から

聞こえてくる

かすかな

声

おにいちゃん

あれは

エミ

の 声

妹は三歳

まだ

あどけなく

しがみついていた

頭をなでてやる

と

不意に

心がひらき

感情の波

が

鎮まった

生身の体

に

刻みこまれた

深い

傷

痛みの中

だから

こそ

感じられる

兄と妹の

絆

エミの

エミ

は

いつも

にっこり

の

笑美さ

かわいいよ！

鉄は

未来に

まっすぐ伸びる

指の先で

笑美の

小さな手

を

ぎゅつと

握った



徒然のエチユード
33

スノーシューの帰り道

前方に

すごく

長い

尾っぽが

動いている？

一メートルもある

高さの

雪壁に向かって

助走

突進

激突

また

突進

またまた

頭から

激突

ラガーマンのよう

キジだ！

雪壁を

よじ上る

つもりか……

スマホでパシャリ

車で

二メートルの距離に

近づく

が

いっこうに

気がつかない

あまりの滑稽さに
笑いを殺すのに
一苦労

失敗を恐れず
果敢に挑む
キジは
偉い！

突然
キジが飛びたつた！
雪壁の上を
尾っぽ ふりふり
歩いている

なんだ
飛べるじゃん！

という声が
聞こえたのか
空高く飛んで
消えた

でも
キジって
飛ぶのが苦手では……？

*キジと思ったのはヤマドリだった。
日本の固有種。
鳥綱キジ目キジ科ヤマドリ属。
野外で会えるのは少し困難な鳥といわれる。

【ご案内】

矢代レイ詩展 ― 詩と生きる ―

日時 7月1日(金) ～ 7月29日(金)

時間 9時～15時 無料

場所 秋田銀行本店 ロビー

秋田市山王3-2-1

なお、土曜日・日曜日・祭日はお休みです。
お問い合わせは、矢代レイまで。

☎ 090 - 1935 - 1180

【あとがき】

三階の部屋の、丁度椅子に腰かけた目の高さに、咲き誇ったハリエンジュの木が見える。黄緑の葉は光に輝きつややか。六月の風にささやくように揺れ、花の波は乳白色。

かつては、プランターに花や野菜を植えて楽しんでたものだが、いまは愛でるだけ。

毎朝、へおはよう〜と呼びかけると、花のかたまりは軽くうなづく。へおはよう〜という返事が心に聞こえてくる気がする。

そのときわたしは、ハリエンジュとひとつになる。

黄緑色に包まれたわたしの心は優しさへとひらかれ、素敵な一日がはじまる。

